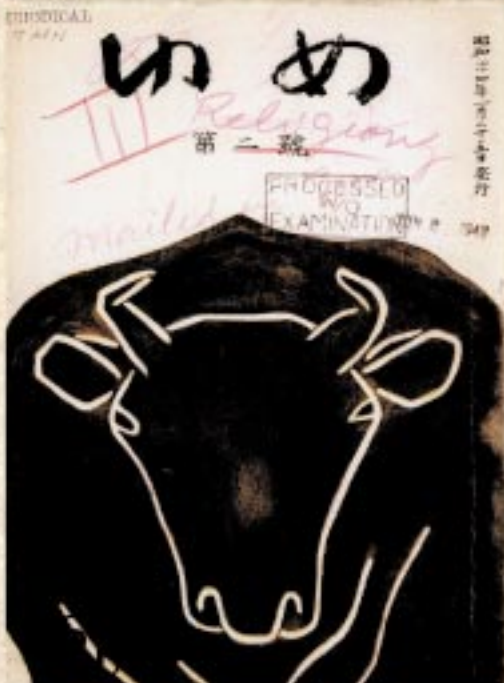


山口県史だより

第21号／平成16年10月

特集 やっぱり、プランゲ文庫はおもしろい



プランゲ文庫所蔵雑誌

『宇部文化』第三号 宇部文化協会 1947.7
『春秋』第五卷第十号 内外図書株式会社 1948.10
『芽生』第三号 山口県農業会 1946.7
『ゆめ』第二号 下関市役所従業員組合 1949.1

特集 やつぱり、プランゲ文庫はおもしろい

米国メリーランド大学のプランゲ文庫には、敗戦後まもない時期に県内で発行された雑誌や新聞が多数保存されています。これらの大半がすでに国内では散逸してしまっており、同文庫に残された出版物は戦後復興期の山口県の諸相を知る上で貴重な資料となっています。今回の特集では、このたび刊行した『山口県史 史料編 現代3』に収録したものを含め、雑誌の表紙を中心にプランゲ文庫の魅力について紹介します（本誌第13号「特集／プランゲ文庫はおもしろい」参照）。*本文中は敬称略

■日本の出版物で埋もれる書庫

メリーランド大学は、ワシントンDCの近郊、メリーランド州カレッジパークにある州立の総合大学で、キャンパスのほぼ中央に聳えるのがマッケルディン図書館です。その地下一階にあるプランゲ文庫には、一九四五～四九年の間に日本全国で発行された出版物が保存されています。タイトル数は、新聞が約一万七〇〇〇、雑誌が約一万三〇〇〇、図書とパンフレットが約七万一〇〇〇と膨大な量に上り、書庫はさながら日本の出版物で埋もれた状態となっています。



メリーランド大学マッケルディン図書館

■占領下で行われた検閲

これらの出版物は、占領期にGHQが実施した検閲を受けるため、出版者から検閲局に提出されたものです。当時GHQは日本の民主化・非軍国主義化を図ることを目的として、新聞や雑誌、書籍などの出版物はもとより、ラジオの放送原稿、映画や演劇の台本、そして手紙の内容や電話の会話に至るまで、あらゆる種類のメディアを対象として検閲を行っていました。

■ゴードン・W・プランゲ

検閲は、米国の対日政策の転換に伴い、一九四九年一〇月末で廃止されましたが、あとには膨大な量の検閲資料が残されました。これに注目したのがメリーランド大学教授のゴードン・W・プランゲ（一九一〇～八〇）でした。西洋史の専門家である彼は、のちに日本では真珠湾攻撃を描いた映画「トラ・トラ・トラ」の原作者として知られるようになっていますが、当時はGHQで戦史の編纂に携わっていました。一九五〇年、五〇〇箱もの木箱に詰められた検閲資料が海を渡り、アメリカに送られました。



プランゲ文庫（撮影=2001.2）

■プランゲ文庫の誕生

こうしてプランゲによってメリーランド大学に持ち帰られた検閲資料は、しばらくそのままの状態でも保存されていましたが、一九六〇年代に入ると本格的な整理が行われるようになり、一九七八年秋には大学当局によって正式に「ゴードン・W・プランゲ・コレクション」と命名されました。

■日本公開で広がる利用

粗末な「仙花紙」に印刷された当時の出版物は劣化が激しいことから、一九九二～九九年にかけて雑誌と新聞のすべてがマイクロフィルムに撮影され、順次、国立国会図書館で公開されました。こうして数奇な運命を辿った検閲資料は、幸いにも廃棄や散逸を免れ、五〇年後の日本で再び利用できるようになりました。現在では戦後史研究の貴重な資料として、占領史の分野はもとより、文化史や地方史など各方面から注目を集めています。

■鮮やかな色彩を放つ表紙

プランゲ文庫には、山口県内で発行された雑誌として三三三誌（一二五五冊）が保存されています。これらの雑誌を見て、もともと印象的なことは、その多くの表紙が多色刷りであり、鮮やかな色彩を放っていることです。日々の食糧にも事欠いた時代に、また「紙飢饉」とも叫ばれた物資欠乏の当時にあつて、よくこれだけ鮮やかな表紙が描かれ、そして印刷されたものだと驚かすにはいられません。

■表紙を描いた人々（本誌の表紙参照）

【宇部文化】第三号の表紙は、画家・松田正平の作品です。松田は一九一三年に島根県日原町に生まれ、七歳で宇部に移りました。東京美術学校卒業後、パリに留学。瀬戸内海を描いた「周防灘」シリーズは多くのファンに親しまれました。八四年日本芸術大賞受賞、二〇〇二年文化庁長官表彰、〇四年没。この表紙は、戦後、光市に居住していた頃のものとして推測されます。

【春秋】第五巻第十号（発行地は東京）の表紙は、画家・土屋幸夫の作品です。土屋は一九一一年に広島県尾道市に生まれ、東京高等工藝学校卒業後、現代美術のアーティストとして幅広く活躍。武蔵野美術大学名誉教授、九六年没。この表紙は、復員後、土屋が下関市長府に疎開していた頃に依頼されたものと推測されます。

【芽生】第三号の表紙は、彫刻家・田坂柏雲が描いたものです。田坂は一九〇五年に小郡に生まれ、高村光雲に師事、二二歳で帝展に入選、

将来を嘱望されながらも四八歳で五二年没。プランゲ文庫に所蔵されている同誌四冊の表紙は、すべて田坂によって描かれています。

【ゆめ】第二号の表紙は、医師・木下友敬の作品です。木下は一九九五年に佐賀県で生まれ、九州帝国大学卒業後、医師として下関市で開業。五六年参議院議員、六三年下関市長、六八年没。木下は、俳句や絵画、登山など幅広い文化活動で知られ、同誌創刊号の表紙も彼の作品です。

■見ているだけで楽しい

映画の同好誌『セントラルニュース』9月号と『KUDAMATSU A.M.C.A. NEWS』NO.4はともに作者の記載がありませんが、いずれも当時大流行した洋画の雰囲気伝えるものとなっています。また、なかには『生人』第五号のように子どもが描いたものかと思われるものもありますが、内容が本格的な総合雑誌だけに微笑ましさも感じさせられます。紙幅の都合で僅かな雑誌しか紹介できないのが残念ですが、見ているだけで楽しい表紙は、まだまだあります。

■魅力尽きないプランゲ文庫

プランゲ文庫がもつ文献資料としての価値と魅力については、これまでも多くの研究者が指摘していますが、ここに紹介した雑誌の表紙など、プランゲ文庫には、まだまだ尽くせぬ魅力が秘められているといえるでしょう。ひよつとすると、雑誌や書籍の表紙を集めて展覧会が開けるかも知れません。

（中司文男）

雑誌提供／メリーランド大学図書館ゴードン・W・プランゲ文庫



生人 第五号 1949.8



KUDAMATSU A.M.C.A. NEWS NO.4 1948.11



セントラルニュース 9月号 1949.9

『通史編』の刊行に向けて

『山口県史 通史編』の初巻となる、『原始・古代』の編集作業を進めています。行政刊行物としての戦後の本格的な山口県の通史は、『山口県文化史』（昭和二六年刊行）以来の刊行です。

原始関係は、考古学の新知見を盛り込んだ内容となるよう、また巻全体を通して写真や図などを多用し、ビジュアルな通史となるよう工夫する方針です。

（担当 河村・徳本）



掲載予定写真の一例／石器の作り方

古代部会

古代の高速道路

写真は山陽新幹線厚狭駅の南側を通る広瀬から浴への直線道の一部です。

古代山陽道は都と大宰府を結ぶ重要な官道でした。古代の官道はできるだけ直線的に造られ、両側に側溝を持つ計画性の高い道路であったことが全国の発掘調査等からわかってきました。道幅は一〇mを超えるものも確認されています。この道が古代山陽道である確証はありませんが、有力な候補の一つと考えられます。

（担当 石風呂・山本美）



旧広瀬踏切付近から撮影（山陽町厚狭）

中世部会

バラバラ文書から中世を見る

下の写真は、写経本の表紙の裏側です。この表紙は、一度使った紙を二枚貼り合わせ、大きさを切りそろえて作っています。そのため、裏に書かれていた文書はバラバラになってしまったのです。

再利用にまわされた文書には、いったい何が書かれていたのでしょうか。断片的ですが、当時の社会の実態が浮かび上がってきます。この史料は『史料編 中世4』に収録の予定です。

（担当 今地・阿武・中司 他）



松江八幡宮天文十二年大般若経紙背断簡文書（宇部市）

近世部会

超世丸

周南市鹿野の潮音洞は、岩崎想左衛門重友が築造したことで有名です。その子孫が開発した超世丸は、「下り腹一通り之妙薬」（注進案）として、爆発的に売れ広範囲に販路がありました。

このほど、大量の古文書に加えて、製薬道具や引札の版木などを調査する機会を得ました。薬はもとより市年寄や庄屋を勤めたときの文書もあり地域の実態も解明できると期待しています。

（担当 河本・松島・宮崎）



岩崎家の看板（明治期のもの）

近代部会

移住者募集

大正十四年（一九二五）、樵野川の河口に八連の排水樋門で潮止めされた広大な干拓地が出現しました。食糧増産を目指す政府の大規模開墾奨励の方針を受けた県営小郡湾干拓事業によるものです。

漁業権補償、飛行場転用問題、米価低落による移住希望者の伸び悩みなど幾多の苦難をくぐりぬけて、この干拓地を舞台に共同作業経営を主とした模範的な農村建設が試みられました。

（担当 浅川・岡本・西井）



移住者募集のチラシ（平生町立平生図書館）

明治維新部会

羽賀台大操練の人員数は？

天保十四年（一八四三）、長州藩は、大軍事操練を羽賀台で実施しました。これを記したのが「講武秘策」ですが、これの参加人数として、一万四二一〇人と三万四九〇六人という異なる二つの数字が出てきます。どちらが実数なのか問題になる部分ですが、前者がそうであることは「凡倍積ニして三万程と相唱候」という記述からわかります。軍事操練では昔からよくあることですが、その威容を誇示するために人数を膨らませて喧伝したのです。（担当 土井・里谷・宗像）



天保関兵之地碑（阿武郡福栄村羽賀台）

民俗部会

空を舞う神楽

二三・六メートルの松の大木から舞う紙吹雪。四半世紀に一度、申年に奉納される柳井市伊陸の南山神社八閔神楽は、この「松の舞」でクライマックスを迎えます。この神楽は元禄十六（一七〇三）年以来、氏子の方々の努力により今日まで継承されてきました。県内には多くの民俗芸能が保存されていますが、民俗部会でも可能な限り調査に入り記録に留めたいと思っています。（担当 村岡・小田）



24年ぶりに奉納された松の舞（平成16年2月29日）

現代部会

ひかりは西へ！

昭和四十七年、山陽新幹線が岡山まで開業、そして昭和五十年には博多までの全線が開通しました。それまで京都・奈良が主流だった首都圏からの修学旅行は、新幹線の開通と軌を一にして、岡山、広島、山口と旅行先を西に伸ばしていきました。ピークの昭和六十年、萩には三二万人の修学旅行生が宿泊し、レンタサイクルでの史跡巡りがブームとなりました。（担当 中司文・古屋・山本香）



日本修学旅行協会での調査（東京）

山口県人よ、めざせ日本一

(株)タマス創業者 田舛 彦介



去る二月五日、八三歳の私に「柳井市名誉市民章」が授与された。卓球を通じて長年の体育貢献が高い評価を受けた。私にとって終生の榮譽であり、この榮譽を汚すことなく、今後、郷土のため、国際社会の平和のため奮闘を誓っている。

河内山哲朗柳井市長の要請で、同日、柳井中学校一・二年生三百余人の生徒に対して講演と卓球指導を行った。若い世代に言葉が通じるか心配もしたが、七〇年間の私の仕事によく反応してくれた。予想外の成果だった。

「求める心の高さが結果を出す」というテーマで話した。中国や韓国や台湾の青少年と比べて、日本の若者は燃えていない。スポーツ育成の分野でそれを感じる。戦争を知らない五九年間の平和の中で、よい時代を過ごしてきた日本の青少年。それを指導する成人社会も立派だと言いつける今日の日本であろうか。

たしかに今日の成人社会は平和を楽しんでいる。スポーツも中高年では盛んで、戦前・戦後に考えられなかった成熟社会となっており、健康と長寿を謳歌している。日本中がそうだ。残念ながら山口県もその中にある。聞けば国民体育大会の成績で、わが愛する山口県は最下位だという。何という悲惨。私の尊敬する第一人者、吉田松陰先生に何の責任もないが、昭和二十八年の全国都市対抗(マツカーサー元帥杯)で、東京、大阪などを破り、柳井町(当時人口二万人)が全国優勝を成し遂げた事実を知ってもらいたい。

山口県史においても、過去の山口県先輩たちがスポーツでどのように努力してきたかを、是非とも取り上げて欲しいものである。(柳井市出身)

田舛彦介様におかれましては、平成十六年七月二十二日にご逝去されました。田舛様には『山口県史 史料編 現代2』及び『山口県史 史料編 現代3』の刊行にあたり、多大なご協力を賜りました。ここに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

こえの
—20—
広場

海の底の源平合戦

民宿「鯛の里」 松本 昭司



瀬戸内海には源氏と平家にちなんだ魚が多く、感心させられる。源氏の代表選手は九郎判官源義経。かたや平家の代表選手平清盛。歴史ドラマに登場する義経は牛若丸として美男子。かたや清盛は実に憎憎しい表情で登場する。義経は晩年には兄の頼朝に追われ悲劇のヒーロー。まさに「判官びいき」なのだ。蛸も大きいのが源氏、小さいのが平家。

ちよつと魚名をひらつてみる。僕の住む沖家室島ではキヨモリという魚がいる。全身に刀のような鋭いトゲがあり、まるで鎧をまとっているかのような美しい魚、ミノカサゴ。カニでは背中に貝殻などをしよい込むヘイケガニ。最近では洗剤のキャップをしよい込むのが現れた。甲羅の紋様が弁慶の顔に似ているベンケイガニ。しかし、源氏の名が付くカニはいない。

さらに漁法でいえばかつて沖家室では、渡り鳥のアビがイカナゴを海面から追い、それを追つてタイなどが浮いてきたところを捕獲する、いわゆるアビ漁を「ヘイケダオシ」と呼んでいた。

東和町に関しては平知盛。城山地区にはこの城があつた。壇ノ浦の合戦で海の藻屑と消えた人物。四国地方ではコシヨウダイをトモモリと呼ぶそう。では源氏はどうか。関東の武将熊谷直実。一の谷の合戦で平敦盛を討つた。アツモリウオとクマガイウオが同じ科にいるのは笑わせる。このほかにも九州ではタメトモハゼ、チンゼイシタビラメというのがいるそう。これは九州源氏鎮西八郎為朝の名をとったものだろう。

こうしてみると平家の方が高級魚。魚の王者マダイを平家魚と呼ぶ。厳島神社の「清盛祭」「管弦祭」、この「管弦祭」は東和町の小積地区の厳島神社で、今でも十七夜に行われている。ここには、宮島の赤い鳥居と全く同じ形の鳥居がある。それだけ馴染みが深い、つまり、それが「平家びいき」なのだ。平安の世は、平家を射つた源氏が鎌倉幕府を開いて鎌倉時代を迎えた。しかし、今の世、瀬戸内の海の底の合戦は、平家に軍配アリ、といったところだろうか。(東和町在住)



阿東町郷土史研究会

新しい時代の変遷、歴史の流れの中にある郷土の史実、それを正しく受け止め、過去の生活を見つめることの大切さを思い、昭和四十八年二月七日、阿東町山村開発センター農林振興室に同好者相集まり、郷土の歴史を探究し、村に伝わる民話や伝説を収集し、明るい町づくりのために少しでもお役に立てばと、会員二名、会長山田頼道、副会長倉増清を選出。「阿東町郷土史研究会」を結成した。初めのうちは隔月に史跡調査を行い、九月には田村哲夫先生をお招きして古文書の解読。四十九年六月『史跡と民話の町』第一集を発行。五十年一月、内田伸先生を迎えて拓本採取の講習会を開き、同年四月『史跡と民話の町』その二を発行した。会員数も逐次増し、近隣の町村の史跡の探訪にまで輪を拡げた。平成二年四月より山田に代り倉増会長。

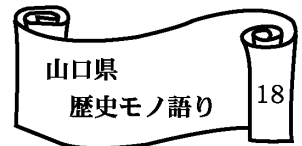
平成十五年度の活動。五月二十四日、二十五日の阿東町第一一回文化祭に参加、生糸とり。機織の実演。山代街道の写真展示。六月に『史跡と民話の町』その一三を発行した。七月二十五日郷土史研究会総会。総会終了後、防府の村上敦朗先生の「坂崎出羽守と千姫」と題しての講演を行う。十一月二十五日萩往還探訪、街道沿いの文化財を巡見する。十一月中旬より嘉年勝山城（吉見氏の城）、この城を取り巻く陶氏の属城、陶氏陣山城（南）、岩枯山城（西）、茶臼山城（北）、和田山城（東）等をはじめとし、町内の古城址調査に一部の会員が参加。現会員五五名。会長倉増清。

阿武郡阿東町大字徳佐下二七二二一一
電話 〇八三九五―六―〇九五―

『史跡と民話の町』



萩往還探訪。佐々並一里塚にて。



会津白虎隊自刃石版画

萩市唐樋町の火除け地蔵堂には地蔵の上に、会津藩主松平容保筆といわれる「忠臣義士」という題名のついた石版画が掲げられています。昭和十四年に書かれた由来

文によれば、戊辰戦争のおよそ一〇年後にはこの石版画が存在していたことになります。

戊辰戦争は、激動の明治維新の過程で生じた不幸な戦争でした。政治的立場の違いから、長州藩と会津藩は激しく対立しついには戦火を交えましたが、戦場となった会津若松では落城し町は壊滅、白虎隊の集団自決など数多くの悲劇が生まれました。それに起因する「反長州」のわだかまり感情が、現在でも会津若松市には残るといわれています。

しかし、会津藩にとって仇敵長州藩の藩都萩市では、昔からこの町内の有志が、毎日堂内を清掃し、生花を手向け、白虎隊士を厚く供養してきました。それは、過酷な歴史的状况の中で散華したいいけな少年たちを供養してあげたいという純粋な気持ちに基づく行為でありましょう。そうした時空を越えた良心的活動に、この地蔵堂を訪れる会津

若松の方々も感動され心を癒されるそうです。堂の近所に住むこの地蔵講の代表・萩原寿紀代さんの言葉はことに印象的でした。「明治維新の尊い犠牲があったからこそ、今があります。だから私たちは白虎隊士を供養するのです。」

堂内には、この石版画のみならず、会津藩士秋月悌次郎の「北越潜行の詩」が墨書された板版など会津藩ゆかりの展示物も見られます。

(土井造)



会津白虎隊自刃石版画



萩市唐樋町火除け地蔵堂

県史刊行の

お知らせ

▼今後の配本予定巻についてお知らせいたします。

『史料編 近世2』（政治2）は、幕藩制成立期にスポットをあて、おおよそ慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いから貞享三年（一六八六）の検地までの、幕藩関係史料、本支藩関係史料、萩藩の近世前期主要法制史料を収録します。これらの史料によって、萩藩が試行錯誤を繰り返しながら藩体制を確立していった姿が読み取れます。

『資料編 民俗2』（暮らしと環境）は、「山村」では、錦町道立野・後野・落合の三集落、「漁村」では豊北町矢玉地区、「農村」では防府市大道地区という、それぞれ環境条件の異なる地域社会をモデル地区として設定し、現地調査により集積した資料を駆使して、「民俗」の記録化を図るとともに、山口県内の暮らしにおける「民俗」の存在意義と役割とを提示します。

どうぞご期待ください。

こちら 県史編さん室

▼去る九月一日、宇部市の宇部市文化会館を会場に第一三回山口県史講演会を開催しました。講師は、山口県史編さん委員・現代部会長の来島浩先生（山口大学教育学部教授）で、演題は

「占領期の言論と文化―プランゲ文庫にみる青春の軌跡―」と題して講演されました。

この講演の概要は、来年三月発行の『山口県史研究』第一三号に掲載する予定です。

▼『山口県史』および『山口県史研究』のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。

〒七五三―八五〇―一 山口市滝町一番一号 山口県刊行物普及協会 電話（〇八三）九三三―二五八三

FAX（〇八三）九三三―九一三九

山口県史の構成・刊行計画（全42巻）

【通史編】 6巻

原始・古代
中世
近世
幕末維新
近代

【民俗編】 1巻

【史料・資料編】 33巻

- 既刊 考古1（原始）
- 既刊 考古2（古代以降）
- 既刊 古代（古代史料）
- 既刊 中世1（記録）
- 既刊 中世2（県内文書1）
- 既刊 中世3（県内文書2）
- 中世4（県外文書・在銘資料）
- 既刊 近世1（政治1）
- ※16 近世2（政治2）
- 既刊 近世3（経済1）
- 近世4（経済2）
- 近世5（文化）
- 近世6（諸家文書1）
- 近世7（諸家文書2）
- 既刊 幕末維新1（政治・社会1）
- 既刊 幕末維新2（政治・社会2）
- 幕末維新3（政治・社会3）
- 幕末維新4（政治・社会4）
- 幕末維新5（経済）
- 既刊 幕末維新6（軍事）
- 幕末維新7（文化）
- 既刊 近代1（政治・社会・文化1）
- 近代2（政治・社会・文化2）
- 近代3（政治・社会・文化3）
- 既刊 近代4（産業・経済1）
- 近代5（産業・経済2）
- 既刊 現代1（県民の証言 体験手記編）
- 既刊 現代2（県民の証言 聞き取り編）
- 既刊 現代3（言論・文化 プランゲ文庫）
- 現代4（産業・経済）
- 現代5（政治・社会）
- 既刊 民俗1（民俗誌再考）
- ※17 民俗2（暮らしと環境）
- 【別編】 2巻
- 統計
- 年表・索引

※を付けた数字は刊行予定年度

山口県史だより 第21号

平成16年10月1日発行

編集・発行／山口県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL083-933-4810

FAX083-928-2705



講演中の来島浩先生